

親子の情緒的関係と子どもの攻撃性及び抑うつ傾向との関連 — 児童期の子どもを対象として —

廣 田 希代子

1. 問題と目的

大人の抑うつについて古くから数多くの知見が蓄積されてきたのに対し、子どもの抑うつが存在が認識されるようになったのは、診断基準の設定や測定質問紙の開発が始まった1980年以降である。その後の調査研究により、児童期の子どもにおける抑うつ有病率は決して低くなく、様々な障害と合併し、成人後に再発したり対人関係や社会生活に障害が持ち越されたりする場合が多いことが明らかになってきた（傳田，2002）。特に日本の子どもたちの抑うつ有病率が高く（村田ら，1994），また大人の抑うつ研究においても抑うつ素因の起源や発達の様相が明らかになっていないことから，子どもの抑うつに影響する諸要因や発現のメカニズムを探る必要性は高い。中でも環境要因としての「両親の養育態度」や「両親との関係」は，子どもに及ぼす影響が大きく，子どもの抑うつ状態と一定の関連性が予想される（辻井ら，2002）が，これまで菅原ら（2002）が「母親の養育態度の暖かさ」と子どもの抑うつ傾向の低さとの関連を見出しているのみであり，より多様な親子関係の諸側面と子どもの抑うつとの関連を検討する必要がある。

ところで精神医学の分野では，幼少期の両親の養育行動と，後のうつ病との間に関連があることが多くの研究で示されてきた（坂戸ら，1999）。特にParker（1993）は，養育態度が何らかの人格及び認知特性を進展させ，それが抑うつ発症を媒介するという『抑うつ発症モデル』を提案・検証し，一定の成果を得てきている。そこで本研究では，子どもの抑うつが大人の抑うつと症候論的にはほぼ同一のものであるという立場（APA，1995）に基づき，この抑うつ発症モデルを子どもに適用し，子どもの抑うつに影響を及ぼす親子関係要因を検討する。そしてその際の媒介特性として子どもの攻撃性を取り上げることとする。攻撃性は，その形成に親子関係が大きく関わる（八島，2002）持続的な特性であり（山崎，2002），しかも子どもの抑うつに特異的であることが知られているが，その攻撃性の性質や，抑うつとの因果関係はこれまでほとんど明確されていない。しかし大人の場合，攻撃性のうち表出されない敵意のみが抑うつ傾向と関連していることが知られており（佐々木ら，2002），子どもについても親子関係の中で表出しにくい攻撃性を形成する場合，攻撃性を表出する子どもに比べ抑うつ

になることが推測される。

以上より本研究では，まず「親子関係」と媒介要因としての「子どもの攻撃性」そして「子どもの抑うつ傾向」の3者間の関係を探る。そしてその結果に基づき，親子関係が子どもの攻撃性を介して子どもの抑うつに与える過程を検証する。尚その検証に先立ち，児童期の親子関係のあり方についても検討する。

2. 方法

【調査対象者】愛知県K市O小学校4，5，6年生268名（男児134名，女児134名）

【調査時期】2003年9月中旬～10月上旬

【調査内容】質問紙（3種）をクラスごとに一斉施行

①親子関係；FDT親子関係診断検査（東ら，2002；母用・父用各60項目・5件法）で親との関係を尋ねた。設定8下位尺度のうち，親との情緒的関係を尋ねる4尺度の得点プロフィールによるパターン分析（結果A）と，FDTを因子分析によって再構成後，統計的に攻撃性と抑うつ傾向の関連を検討する分析（結果B）の二通りを行った。

②子どもの攻撃性；山崎ら（2002）によるProactive-Reactive Aggression Questionnaire for Children（21項目・4件法）を使用。因子分析（主因子法，バリマックス回転）により，「不表出性攻撃（7項目， $\alpha = .84$ ）」、「表出性攻撃（7項目， $\alpha = .82$ ）」「関係性攻撃（6項目， $\alpha = .80$ ）」の3因子を抽出。各因子の項目の合計得点を各攻撃性得点として以降の分析に用いた。

③子どもの抑うつ傾向；Birllesonら（1987）によるDepression Self Rating Scale for Childrenの日本語版（村田ら，1996，18項目・3件法）を使用。主成分分析を行ったところ，第1主成分への十分な負荷が認められた。18項目の合計得点を抑うつ傾向得点として以降の分析に用いた。18項目の $\alpha = .81$ である。

3. 結果A（親子関係パターンによる検討）

母尺度と父尺度で平均得点の差を検討したところ，「被拒絶感」に差はなく，「積極的回避」では父親得点有意に高かった。しかしそれ以外の「心理的侵入」「厳しい躾」「両親間不一致」「達成要求」「被受容感」「情緒的接近」では母得点が父得点より有意に高かった

(*は情緒関連因子)。次に情緒関連4因子の得点パターンによって分類し、安定タイプとして「安定型」「複合型」、不安定タイプとして「不安定型」「準不安定型」の計4群を得た。父母共に各パターン出現率に性差・学年差はなく、母父両方とある程度安定した情緒的関係を持つ子どもは全体の8割で、残りの2割は母親または父親、あるいは両親との情緒的関係が不安定であるという実態が明らかになった。分散分析でパターン4群の攻撃性得点と抑うつ得点を比較したところ、母父其々との親子関係パターンが良いほど子どもの抑うつ得点が低く、更に父親については3攻撃性全てにおいて親子関係のパターンが良いほど得点が低かった。特に安定群は他群と比較すると有意に得点が低い場合が多かった。

4. 結果B (FDT統計処理による検討)

＜新FTD＞FDTは、尺度得点の個別の吟味やパターン分析を目的として作成されたものであるため、FDTの再構成を行った。母尺度父尺度それぞれについて、天井効果・フロア効果が推測される項目を除外し、主成分分析により6因子解を選択後、エカマックス回転による因子分析を繰り返し項目を決定した。その結果、母尺度は「*母親との情緒的交流」、「*母親からの関与（情緒面）」、「*母親に受け入れていない感じ」、「母親の厳しい躰」「母親と父親の不一致」「親からの達成要求（学業）」の計34項目6因子構成で、 α 係数は.56～.91、父尺度は「*父親に受け入れられていない感じ」、「*父親との情緒的交流」「父親の厳しい躰」「父親からの達成要求（将来）」、「*父親を拒否する気持ち」「父親からの関与（事実面）」の計28項目6因子構成で、 α 係数は.59～.81であった（*は情緒関連因子）。項目数が4の因子が含まれる事を考慮すると、まずまずの内の一貫性であった。新FDTと原尺度を比較すると、各因子に属する項目に相違はあるものの、尺度構成は類似していた。因子ごとに項目得点を加算し、新FDTの下位尺度得点として以降の分析に用いた。

＜新FDT・子どもの攻撃性・抑うつ傾向の各得点の学年差、男女差＞分散分析において、「母親との情緒的交流」でのみ、4年生が6年生より得点が有意に高かった。性差については、「抑うつ傾向」、「不表出性攻撃」では女兒が男児より有意に得点が高く、「母親・父親からの達成要求」、「父親の厳しい躰」、「表出性攻撃」で男児が女兒より有意に得点が高かった。本結果で性差が顕著であったため、以降の分析は男女別に行った。

＜各尺度間の相関分析＞新FDTの情緒関連因子間の相関が顕著で、特に女兒における相関が強かった。《新FDT×攻撃性》では、親との情緒的関係の悪さと攻撃

性の高さに正の相関がみられ、その傾向は相対的に女兒のほうが顕著であった。一方「達成要求」と攻撃性との間には男女共に相関は見出されなかった。男児と女兒で傾向が異なったのは、男児で「父親の厳しい躰」と「表出性攻撃」が、女兒で「両親の不一致」と「攻撃性全般」が、其々正の相関関係にある点であった。《新FDT×抑うつ傾向》でも、親との情緒的関係の悪さと「抑うつ傾向」の高さに正の相関がみられ、女兒において相対的にその傾向が強かった。一方「厳しい躰」が抑うつ傾向と相関を示したのは、女兒が「父親の厳しい躰」を感じる場合のみであった。男女では、男児の感じる「父親からの達成要求」が抑うつ傾向と負の相関を示したのに対し、女兒の感じる「母親からの達成要求」は抑うつ傾向と正の相関を示した点が異なっていた。《攻撃性×抑うつ傾向》では、3攻撃性全てにおいてその高さと抑うつ傾向の高さに正の相関が見られたが、男女共「不表出性攻撃性」と抑うつ傾向の相関の強さが特に顕著であった（男 $r=.45$ 、女兒 $r=.65$, $p<.01$ ）。

＜抑うつ傾向の高低群における新FDT・攻撃性得点の差＞抑うつ高群（抑うつ得点16点以上、全体の約20%）と抑うつ低群（得点下位25%以下）でのt検定では、「情緒的交流」「受け入れられない感じ」「関与（情緒）」といった情緒関連因子で得点に有意差が見出された。一方「厳しい躰」、「達成要求」は高低群で差は無かった。また3攻撃性全てにおいて、高群が低群より有意に攻撃性得点が高く、特に女兒の「不表出性攻撃」の得点差が顕著であった。

＜各攻撃性高低群における抑うつ傾向得点の差＞攻撃性の特徴をより明らかにするため、分散分析で各攻撃性のみ高い群と全ての攻撃性が低い群の4群における抑うつ傾向得点を比較した。女兒で「不表出性攻撃」のみ高い群と全ての攻撃性が低い群との間に有意差が、「不表出性攻撃」のみ高い群と「関係性攻撃」のみ高い群との間に有意傾向が認められ、男女で各攻撃性と抑うつ傾向との関連に違いがある可能性が示唆された。

＜親子関係が攻撃性を介して抑うつ傾向に影響を与える過程について＞各攻撃性と抑うつ傾向に対し、モデルで前段階に有るか否か有意な相関のある変数を全て投入した重回帰分析（ステップワイズ法）を実施し、有意な回帰を示す独立変数を選出し、その独立変数をもとに改めて強制投入法による重回帰分析を行い、標準偏回帰係数と重回帰係数を算出した。その結果、男児では主として「親から受け入れられていない感じ」が子どもの「不表出性攻撃」及び「関係性攻撃」を介して子どもの抑うつを高める過程が見出された。女兒では「不表出性攻撃」のみについて同様の過程が見出されたが、男児と比べる

と、より多岐に渡る親子関係が「不表出性攻撃」を引き起こし、かつそれによって引き起こされる「抑うつ傾向」の説明率が相対的に高かった。女兒においては「不表出性攻撃」が媒介する場合を含め、抑うつ傾向の原因が親子関係にある傾向が男児に比べて高いことが示唆された。

5. 総合的考察

児童期後期、特に小学校5,6年生は思春期前期にあたり、少しずつ親離れを図る時期である。また、様々な青少年問題の低年齢化の影に家庭的問題が取り沙汰される昨今、その時期の親子関係は正に関心のもたれるところであろう。今回の結果からは、約2割、つまり40人クラスで7~8人以上の子どもたちが両親、あるいは一方の親との情緒的関係にかなりの不安定さを感じており、ここでその多少を論ずることは出来ないが、この時期の子どもの心性として留意すべき数値であると考えられた。同時に、その時期においても母親との関係は父親との関係に比べより密接なものであることが明らかになった。その傾向がポジティブな面とネガティブな面の両側面に共通していること、更に精神面での発達が男子より先んずる女兒において顕著であったところから、母親からの自立を模索が表現されていると捉えることができよう。しかしながら、女兒の母親との情緒的関係に対する敏感さ

は、囁かれる母娘密着という風潮との関連から関心をもたれるところでもある。

次に、児童期における抑うつ傾向が予想以上に高いという実態と共に、親子関係、特に親子の情緒的関係と子どもの攻撃性及び抑うつ傾向の密接な関連が明らかになった。そして仮説どおり、親子関係によって引き起こされる子どもの不表出性の攻撃が、子どもの抑うつ傾向を高める方向に働くという過程が支持された。特にその過程における男女差は注目に値する。すなわち、女兒においては、抑うつ傾向及び攻撃性が親子関係の様々な側面から引き起こされやすい点、しかも親子関係から引き起こされる攻撃性が不表出性のものになりがちで、それが抑うつ傾向と強く関連している点、そして結果として女兒のほうが抑うつ傾向が男児より高い点である。成人においてもうつ病の有病率は女性のほうが男性より高く、既にその起源は児童期に始まっている可能性がここに示されたといえよう。現時点での子どもの精神的健康のみならず、生涯にわたる精神的健康の観点からも、日常生活の中で暖かい情緒的な交流を親子で持つこと、決して受け入れられない感じを子どもが持つようなことのない接し方が、児童期の親に求められているといえる。今後は、更に発達の視点からの縦断的な調査や、仲間関係、ストレス要因も含めた検討を試みたい。